



Title	比較の意味論的考察 : 特に命題選択比較について
Author(s)	丸谷, 満男
Citation	Osaka Literary Review. 1968, 7, p. 6-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

比較の意味論的考察

——特に命題選択比較について——

丸 谷 満 男

I

(1) John is taller than Tom.

(2) John is more tall than thin.

この二文を対比して、大塚高信編「英文法辞典」は、(1)のような比較を「2個(以上)の事物相互間における程度の大小を比較考量」するものとし、(2)のような比較を「同一物の異った二つの性質を比較」するものとしている。Otto Jespersen がその著 *The Philosophy of Grammar* に、前者は primary 間の比較、後者は secondary なあるいは tertiary な観念つまり属性間の比較であるという説明を与えているのも同じことを言っているのである。

以上の説明はそれはそれで結構なのであるが、筆者は筆者なりの立場から比較という言語現象を考察したい。

II

人間の発話は、根本的には、命題・命題関数・叙述関数とそれらの '∧: and' '∨: or' '∼: not' '→: if ... then' などの論理語による結合の表現、つまり表象の表現でもあり、さらに、この方が現実にはより一般的な現象であるが、その表象に話者の判断を示す陳述、情意を示す疑問・命令・願望・感嘆といった語用論的機能が加わってなされるものである。それで、発話の根本的な意味様式を図示すると(3)のようになる。

(3)	}	Assertion Question Command Wish Exclamation	}	$F(a), H(a, b), \dots$ $(\exists x)F(x), (x)F(x)$ $f'(x), f''(x)$	……命題 ……命題関数 ……叙述関数
-----	---	---	---	---	--------------------------

命題・命題関数についてはかなりよく知られているからここでは述べない。しかし、叙述関数については、比較の説明をするのに重要であるから簡単に説明する。この説明は Hans Reichenbach の *Elements of Symbolic Logic* (The Free Press, New York; 1947) に依拠している (*ibid.*, §54)。叙述関数は次のように定義される。

$$(4) f'(x) = D_f ({}_y) f(y, x)$$

$$(5) f''(x) = D_f ({}_f) [f(x) \wedge r(f)]$$

(4)の定義を説明すると「 $f'(x)$ は x に対して f なる関係にある y 」ということである。今 f を ‘the father of’ とすると $f'(x)$ は ‘ y : the father of $x = ?$ ’ ということで、 x がある定数たとえば John Stuart Mill とすれば y は James Mill と値が決る。つまり $f'(x)$ はある値を要求する。他方(5)は「 x なる物に性質 f があってその f はある絶対規定 r の値である、そのような f 」と説明される。たとえば、 r を ‘age’ とすると $f''(x)$ は ‘the age of x ’ ということで、 x にある定数を入れると $f''(x)$ の値も 15才とか 30才とかと決ってくる。このように $f''(x)$ はある数値を要求し測度性を持っているといえる。Reichenbach は $f'(x)$, $f''(x)$ がただ一つの値をとる時その叙述関数を functor と言っている。ところで、毛利可信教授も「Predicate 構文と Functor 構文」(『英語青年』1967年7月号)という論文で functor について述べておられるが、Reichenbach が叙述関数というものの中で $f''(x)$ に相当するものを functor とされている。比較の考察をする上からは $f''(x)$ が重要であるので、筆者は $f''(x)$ を functor とする毛利教授の説に従いたい。

次に、陳述その他発話の語用論的機能の説明であるが、中島文雄博士の「英文法の体系」(研究社、1961年)56頁以下に判断・情意の様相についての簡にして要を得た説明があるのでそれを参照していただきたい。ただ比較の考察にあたって次のことに留意しておかねばならない。陳述の modality には、その確実性が論理的に確然としている noncontingent なものと、事実に依存している contingent なものがある。noncontingent な陳述は necessary なものかあるいは impossible なものであり、contingent な陳述は non-necessary (論理的に necessary でない)でありかつ possible (論理的に impossible でない)ものである。これらの modality は、necessary な陳述を p 、impossible なものを q 、contingent なものを s とすると、 $p=1$ 、 $q=0$ 、 $0<s<1$ というような数値で示すことができる。すなわち陳述には確率測度 (probability measure) という測度性がある。陳述の測度性は、日常言語にもたとえば 'possible' 'must' といった表現形式があり、数学的にも形式化されている。情意についても、その強さということでその測度性を考えることができ、日常言語でも 'Who did it?' に対して 'Whoever did it?' のように表現形式を持っているが、陳述の測度性ほど精細には形式化されていない。

III

さて、(3)の発話の根本的な意味様式によって(1)(2)はどのように説明されるだろうか。まず(1)は、 a : John, b : Tom, τ : tallness を表わすとすると

$$(6) f''(a) = ({}^1 f)[f(a) \Delta \tau(f)] > f''(b) = ({}^1 g)[g(b) \Delta \tau(g)]$$

というようにその意味を記号化する。またいわゆる「2個(以上)の事物相互間における程度の大小を比較考量」する比較の他の言語形式

(7) John is as tall as Tom.

(8) John is the tallest boy in his class.

の意味は、それぞれ

$$(9) f''(a) = f''(b)$$

$$(10) B(a) \wedge (y) [B(y) \wedge (y \neq a) \rightarrow f''(a) > f''(y)]$$

(B: boy in the class)

のように記号化される。(1)(7)(8)のようないわゆる「2個(以上)の事物相互間における程度の大小の比較」を表わす言語形式は、(6)(9)(10)からわかるように二つ(以上)の functor の数値を比較している。それで、これらを「functor 比較」と名づける。functor 比較については、英文法書でも常に取扱われ考察も進んでいるようであるが、(2)のような比較についてはあまり言及されないようである。本論では、以下「同一物の異った二つの性質の比較」といわれる言語現象を主として考察する。

IV

(2)は John の性質が thin というより tall だということを述べたものだが、これは(3)の意味様式ではどのように記述されるだろうか。ここで次の实例に注目したい。

(11) “... I was going to shut the door, but I heard a queer sort of noise.”

“What sort of noise? A cry? A scream?”

Robinson jumped a little. “I dunno. More like gurgle. ...”

—J. D. Carr, *The Third Bullet*

ここには一つの変な物音がある。それがどんな物音であったかを Page 警部が門番の Robinson に事情聴取をしている。言語学的にはその事実どんな叙述を与えるか、つまりどんな命題が事実と合致するかが問題である。Page 警部は現場に居合わせていなかったのだから、どんな叙述を与えればよいのか決め手がない。証人に決めてもらうしかない。それで Robinson に質問をするのだが、それを記号化すると

(12) (Question) [cr(n) v sc(n)]

(n: noise, cr: cry, sc: scream)

となる。一方証人の Robinson もはっきりと叙述を与えられる程明確に現場を目撃したわけではない。だから 'I heard a queer sort of noise.' と言ったわけだが、Page の示唆によって彼の意識には

(13) cr(n) v sc(n) v gu(n) (gu: gurgle)

と記号化されるような表象が浮ぶ。この disjunctive な表象は心理的には迷いである。どの命題を選べばよいか 'I dunno.' である。この迷いの中からためらいながら gu(n) を選択して陳述し 'More like a gurgle.' という発話が生じる。この発話をパラフレーズすると

(14) It sounded more like a gurgle than a cry or a scream.

となる。(14)のような発話は、前提条件として(13)のような disjunctive な表象があり、その中からある一つの表象を選択して陳述しているのである。同様に(2)の発話も前提として

(15) ta(a) v th(a) (ta: tall, th:thin)

というような表象があって、その二つから ta(a) を選択し陳述しているのである。

以上の考察から、普通「同一物の異った二つの性質の比較」といわれる比較は、(3)の意味様式によって説明すると次のようになる。まず前提条件として

(16) $p \vee q \vee r \vee \dots$ (p, q, r : 命題)

と表記されるような表象があって、その命題 p, q, r の中からどれかを比較選択して陳述する言語形式である。記号化すれば

(17) $(p \vee q \vee r \vee \dots) \wedge (\text{Assertion}) p$

となる。III に述べた functor 比較に対して「命題選択比較」と名づける。

V

この命題選択比較は、英語ではどのような言語形式にデザインされて表現されるだろうか。以下実際の用例を観察整理してみる。

まず第一に、(17)で示さるような意識の様式に沿って言語形式化したものがみられる。つまり「 p とも言えるが q とも言える、どちらかといえば p と言うのが適当」というように「言う」ということを言語形式で表現する。(以後の用例中の下線・波線は筆者のものである。前者は当該問題の言語形式を示し、後者は命題選択比較で比較されるそれぞれの命題の中心の観念を表わしている語句を示す)

(18) I feared — or should I say, hoped? — the allusion to me would make Mr. Rochester glance my way; ... — C. Brontë, *Jane Eyre*

(19) The great changes — for which the abolition of feudalism cleared the way — that were to transform the face of Japan were indeed revolutionary; but the events of 1868—9 are properly described as a Restoration. — Richard Storry, *A History of Modern Japan*

(20) Outlines were still more blurred by a smoky white vapor, not light enough to be called mist or thick enough to be called fog, ... — J. D. Carr, *The Third Bullet*

(21) ‘Sober as a newt,’ Fred said. ‘Sober as — ’

‘Fred, you’re being flippant,’ Aggie said, ‘and in view of the seriousness — ’

‘Frivolous,’ Fred said. ‘That’s the word. Not flippant. Eh, Mr. Sylvester? Frivolous?’ — H. E. Bates, *The Day of the Tortoise*

この表現方法が set-phrase となっているのに(20)のような ‘not to say’

がある。

⑳ He was large, not to say fat; — A. Christie, *The Case of the Middle-Aged Wife*.

N. B. ‘not to say’ と類似の set-phrase に ‘not to mention’ があるが、これらの相異に注意しておかねばならない。次の引用はある事業をするのに必要な費用を数えたてているところである。

Two thousand for the old factory, Bill Tatum and four carpenters working out there at eighty cents an hour, seven thousand dollars worth of machinery already ordered, not to mention what a specialist like Morris Ritz is costing. — T. Capote, *The Grass Harp*

この例からも分るように ‘not to mention’ は ‘as well as’ の意味であって、それを(3)の意味様式で記述すると、命題選択比較の(17)とは根本的に異なっていて

㉑ (Assertion) ($p \Delta q \Delta r \Delta \dots$)

となる。ただし㉑には ‘not to mention’ の持つ精細なニュアンスまでは表記していない。

VI

命題選択比較を表現する英語の言語形式の第二は、(17)のような意識の様式に沿った第一の形式とは異って、 p , q , r の modality つまり確率測度を比較し、陳述したい命題 p の確率測度が他の斥けられた命題 q , r のそれより大きいことを示すというようにデザインされた言語形式である。この形式には(a)~(e)のように幾通りかの型がある。

(a) rather

‘rather’ は元来 ‘rathe’ の比較級で、㉒のように soonness についての functor 比較を表現するものであった。

㉒ When Duncan is asleep, / Whereto the rather shall his day’s hard journey / Soundly invite him, … — Shaks., *Macbeth* I, vii, 62

しかし現在では、命題選択比較を表現する代表的な言語形式となっている。‘rather’ を用いる形式もいくつかあり次にその実例を示す。

(25) And yet it is said, the Rochesters have been rather a violent than a quiet race in their time: ... — C. Brontë, *Jane Eyre*

(26) Above twenty of those clad in this costume were full-grown girls, or rather young women; ... — *ibid.*

(27) It did not seem as if a prop were withdrawn, but rather as if a motive were gone: ... — *ibid.*

(28) There sprang up, hardly a deep friendship — rather an intimate palliness utterly untouched by romance. — Roy Vickers, *The Yellow Jumper*

‘rather’ を用いる言語形式が、命題の比較選択という迷いから、命題間の対立・対照を契機として ‘Certainly!’ の意味を表わす meiosis の用法を生じていることも知られている。(29)は迷いの残っている例であり(30)は meiosis の用例である。

(29) “... I ask again, is there anything the matter?”

“Nothing, now: I am neither afraid nor unhappy.”

“Then you have been both?”

“Rather: but I’ll tell you all about it by-and-by, sir; and I daresay you will only laugh at me for my pains.” — C. Brontë, *ibid.*

Jane は今は afraid でも unhappy でもないが、今までは Rochester が笑うかもしれないが、どちらかという to afraid であり unhappy であったというのである。

(30) ‘Are you coming here again?’

‘Yes, rather! I sometimes come twice a week.’ — Roy Vickers, *The Rubber Trumpet*

週に2回も来ることがあるのだから、来週また来ることになっても当然のことだというのである。

(b) more (less, not less) ~ than ~

最初に(2)で示した文はこの型に属する。実例を二三加える。

(31) It was more frightened than hurt ... — Dodie Smith,
The Hundred and One Dalmatians

(32) You are more English than German anyway. — J. D. Carr,
The Proverbial Murder

‘more’の代りに‘not less’の用いられている例

(33) He felt, with not less pleasure than amazement, that he was
looking upon the most accomplished dancer he had ever seen;
... — L. Hern, *Of a Dancing-girl*

‘less ~ than ~’の用例

(34) Downstairs in the kitchen, less disconsolate than still bemused,
Fred put some of the gooseberries in a saucepan to stew. —
H. E. Bates, *ibid.*

(c) more like ~ than ~

この型は(11)に示したものである。(b)の一種とも考えられるが、‘like’の有無という外部言語形式の相異で別の分類にする。‘It is gold.’と‘It is like gold.’を比べると、前者は「それは金のクラスに属する」という分類を後者は「それは金のような性質がある」という叙述を表わしているのからも分かるように、この‘like’は支配する名詞と共に、その名詞の示すクラスの特性を叙述する機能、言うなれば支配する名詞を形容詞化する働きがある。

(35) It looked more like a cosy parlor than a kitchen; ... —

T. Capote, *ibid.*

(35) の ‘It’ は台所のことなのだが、それが非常に居心地がよいので ‘It looked like a kitchen.’ という命題より ‘It looked like a cosy parlor.’ という命題を選んで陳述するというのである。もう一つ例を挙げると

(36) Suddenly she laughed again and Fred couldn't help thinking what a remarkable, brilliant sound it was. It was more like a spontaneous piece of bird song than a laugh. — H. E. Bates, *ibid.*

(36) の意味は次のようなことである。Fred は笑い声を聞くのだが、社会の慣習に従って ‘It is a laugh.’ というだけでは彼の心はあまりにも感嘆の念に打たれている。Fred のその気持を表現するのに、常識的に ‘It is a laugh.’ の代りに ‘It is like a spontaneous piece of bird song.’ という命題を選ぶことになる。

しかし、次の例は同じ言語形式でありながら、functor 比較である。

(37) I had never seen that handsome-featured face of his look more like chiselled marble than it did just now, ... — C. Brontë, *ibid.*

彼の顔の大理石像性の程度つまり値を、その時とそれより以前とで比較しているのである。

(d) not so much ~ as ~

この言語形式は functor 比較も表現しうるが、次の (38) (39) を対照比較すればその意味の相異は明白である。

(38) I have not so much money as you.

(39) He is not so much a scholar as a writer.

(38) は私の所持金と君の所持金の数値を比較しているのであり、(39) は ‘He is a scholar.’ と ‘He is a writer.’ のうち後者をとるというのであ

る。

この型の実例を示す。

(40) And that feeling was not so much the sense of being protected by her father and mother as of being with, and being one with her brothers. — Willa Cather, *The Best Years*

(41) Nothing but complete silence, not so much hushed and prayful as condemnatory, greeted him on the darkened landing at the head of the second flight of stairs. — H. E. Bates, *ibid.*

(e) better

これは実例はあまり見当たらないが次のような例があった。

(42) He had spoken earnestly, mildly: his look was not, indeed, that of a lover beholding his mistress; but it was that of a pastor recalling his wandering sheep — or better, of a guardian angel watching the soul for which he is responsible.
— C. Brontë, *ibid.*

N.B. ‘He can read English, much more German.’ ‘He cannot read English, much less German.’ の ‘much more’ ‘much less’ の構文は、確率測度の比較を表現していて今述べた(a)～(e)の構文と類似しているが、(17)のような命題選択比較を表わすものでなく、‘not to mention’と同様 (23) (Assertion) (p A q A r A …) を表現するものである。

以上のように、命題選択比較を表わす英語の言語形式の第二のものは、‘rather’ ‘more’ ‘less’ ‘much’ 等の modality を示す副詞が文修飾副詞として用いられている。ところで、日本語には英語のこの第二の言語形式に相当する形式がなく、Vに示した英語の第一の形式に相当するものだけである。したがって、英語の第二形式の文を日本語に翻訳する時は、(2)を

「ジョンはやせているというよりは背が高いのだ」と和訳するように、英語の第一形式に相当するような言語形式の日本語に表わすことになる。

VII

V・VI で命題選択比較を表現する英語の言語形式の代表的なものを観察したのであるが、次にその応用形式とでもいうべきものを考察したい。まず次の例文(43)の意味を考えてみる。

(43) I would rather be incensed than saddened. — C. Brontë,
ibid.

これは ‘I am saddened.’ であるよりは ‘I am incensed.’ でありたいという願いを表わしたものである。(3)の意味様式で表記すると

(44) $(p \vee q) \wedge (\text{Wish}) p$

というように記号化される。命題選択比較の意味様式を示す(47)とは ‘(Assertion)’ が ‘(Wish)’ と入れ代っている点が違うだけである。願望は ‘would’ という助動詞によって表わされている。この言語形式については、George O. Curme が *Syntax* (Maruzen Asian Edition) の 399 頁で *modest wish* を表現するものとして言及している。そこにはさらに、‘would rather’ の形式は ‘would’ の代りに、あまり一般的ではないが、‘had’ を、‘rather’ の代りに古くは ‘liefer’ ‘as lief’ を、今では ‘sooner’ ‘as soon’ を用いるという説明がある。次に *Jane Eyre* からの用例を列挙する。

(45) I had rather be a thing than an angel.

(46) I'd as soon offer to take hold of a blue *ignis fatuus* in a march.

(47) I would fain exercise some better faculty than that of fierce speaking.

また、次のようないわゆる ‘had better’ の構文はどのような意味を持っているのだろうか。

- (48) Were I not possessed with a purpose beyond my own I had better be a ploughman than a philosopher. — Bernard Shaw, *Man and Superman*

この文の意味は「エゴイズムを超越した目的を持っていないなら、哲学者でいるより百姓になれ」ということだが、今

(49) A: I am a ploughman.

(50) B: I am a philosopher.

なる二つの命題 $A \cdot B$ を定めると、 A と B を比較して「 A となれ」と自己に命令しているのである。したがって、‘had better’ の構文の意味を(3)の意味様式で記号化すると

(51) $(p \vee q) \wedge (\text{Command}) p$

ということになる。実際に用いられている英語では、(52)のように $q = \sim p$ となって $\sim p$ は外部言語形式には現われない場合が多い。

- (52) “You have hitherto been my adopted brother: I, your adopted sister; let us continue as such: you and I had better not marry.” — C. Brontë, *ibid.*

VIII

さらに別の応用形式として

- (53) When he gets to thinking, he’s just as likely to run down a cow as not. — Willa Cather, *ibid.*

に見られる ‘as likely as not’ という言語形式を調べてみる。今

(54) A: He runs down a cow.

というような命題 A を定める。(53)の言語形式に随伴した意味は、彼が考え事すると A の確率測度と $\sim A$ のそれとが同じだということである。しかし、その真の意味は、牛に自動車が衝突することはそうひんぱんにあるわけでないから、 $\sim A$ の確率測度はかなり大きい、それと同じ位の確率で

Aが生じるということで、Aの確率測度の大きいことを暗示しているのである。

応用形式の第二のものとして、(17) $(p \vee q) \wedge (\text{Assertion}) p$ の $q = \sim p$ という場合を表わす言語形式である。なお、この言語形式では用いられる副詞もしくは形容詞によって、(17)の陳述の他に、(44)や(51)のように願望・命令を表現することができる。また、(52)で $\sim p$ に相当する‘than not’が外部言語形式に現われなかったように、この応用形式でも $\sim p$ に当る‘as not’が現われないこともある。以下用例を示す。

まず、陳述を示す場合。(53)以外に(55)の‘as often as not’がある。

(55) Lying awake, the floor creaked; the lit house was suddenly darkened, and if she raised her head she could just hear the click of the handle released as gently as possible by Richard, who slipped upstairs in his socks and then, as often as not, dropped his hot-water bottle and swore! — Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway*

この例で‘often’が頻度つまり確率測度を表わす副詞であることは(53)の‘likely’と同じである。

次は願望を示す場合。

(56) For my part I am just as glad he killed himself. — W.S. Maugham, *Ashenden*

この‘glad’は‘Will you be at our party? — Yes, I’ll be glad to.’の‘glad’のように話者の願望を示す形容詞である。(56)の意味は、彼に生きていてもらいたいのが当然の願望ではあるが、彼の自殺も私には望ましいことだということである。

最後は、命令を示す場合。

(57) ‘They lure you on with flattery and then laugh at you. It’s as well to be on guard, or you may find yourself humiliated

where you least expect it. — Roy Vickers, *The yellow Jumper*

この文の意味は「彼らはへつらいを言っているので君は安心するのももつともだが、それと同じ位用心しておった方がよいよ」と忠告をしているのである。さらに

(68) “Mr Rochester, I may as well mention another matter of business to you while I have the opportunity.” — C. Brontë, *ibid.*

のような、いわゆる ‘may as well’ の構文もこの形式に属する。

IX

以上、命題選択比較について考察をしたが、意味様式と言語形式を対応させて要約すると次のようになる。

1. $(p \vee q \vee r \vee \dots) \Delta (\text{Assertion}) p$
(18)~(42) [(23), (37), (38) を除く] (53)(55)
2. $(p \vee q \vee r \vee \dots) \Delta (\text{Wish}) p$
(43)~(47) [(44) を除く] (56)
3. $(p \vee q \vee r \vee \dots) \Delta (\text{Command}) p$
(48), (52), (57), (58)